

# 追憶の中の追憶

—*The Sound and the Fury* における 1898 年—

小 南 悠

**Synopsis:** In the first section of William Faulkner's *The Sound and the Fury*, Benjy frequently thinks back to a happy day in 1898, when his sister Caddy muddied her drawers in the river and their grandmother's funeral took place at their mansion. On the other hand, Benjy's brother Quentin in the second section seldom remembers this symbolical day, though he is unconquerably obsessed by thoughts of sexuality and death throughout the section. This fact seems all the more significant because Quentin's narration often calls to the reader's mind various scenes in 1898 depicted in the preceding section and sometimes evokes an image of a funeral. With respect to this seemingly unnatural incompleteness of recollection in the second section of *The Sound and the Fury*, this paper suggests a kind of peculiarity in Quentin's consciousness.

## 1. はじめに - 1898 年のあの日

William Faulkner (1897-1962) の *The Sound and the Fury* (1929) 第 1 章は、Compson 家の三男 Benjy の意識に浮かび上がる様々な過去の記憶を辿りながら、最終的には、1898 年の祖母の葬式の日には四兄妹が揃って床に就く場面を描き、その幕を閉じる。それはひとえに、1898 年の一日が、Benjy のこれまでの人生の中で「最も幸福」だった時代の記憶であるからに他ならない (大橋 55)。1898 年のこの日、祖母 Damuddy の葬式が執り行なわれている屋敷から遠ざけられ、川辺で遊ぶ四兄妹は、日暮れとともに屋敷へ戻り、夕餉を済ませたのちに召使い一家の小屋へと向かう。その道すがら、Caddy が屋敷の中を覗こうと木に登ったところで黒人召使い Dilsey に見つかり、彼らはそのまま寝室に入れられることとなる。この一日は、川遊びの最中に Caddy のズロースが泥で汚れ、屋敷では葬式が行なわれたとい

う意味で、その後の Compson 家の崩壊を象徴するふたつの出来事が起きた日であるのだが、Benjy にとって、この日の一連の出来事は、まだ幼い兄妹と過ごした幸せな幼少期の記憶として、彼の脳裏にとりわけ強烈に刻印されている。だからこそ、Benjy の意識は都合 18 回にもわたって 1898 年の一日へと立ち戻るものであり（『フォークナー事典』696-99）、その回想の総量は章全体のおよそ 5 分の 1 を占めている。

その一方で、第 2 章において、語り手 Quentin が 1898 年のあの日を追憶する箇所はほとんどない。第 1 章と同じく、この章でも、無数の回想が挿入され、物語の時制は極端に入り乱れるのだが、直接的に 1898 年の記憶が想起されるのは 2 箇所しかないのだ（『フォークナー事典』703-10<sup>1</sup>）。そのひとつは、家出を宣言する Caddy と泣きべそをかき Benjy に言及した、“*I’m going to run away. He began to cry she went and touched him. Hush. I’m not going to. Hush. He hushed. Dilsey*” (88-89) という箇所であり、いまひとつは、死の匂いを嗅ぎ分ける Benjy の嗅覚に触れたもので、“*Benjy knew it when Damuddy died. He cried. He smell hit. He smell hit*” (90) という箇所である<sup>2</sup>。Quentin の脳裏をよぎる 1898 年のあの日の記憶は、Caddy のズロースと祖母の死ではなく、Caddy の家出と Benjy の嗅覚を焦点化するたぐいのものであり、どちらも章の序盤に挿入された、きわめて短い断片でしかない。

ここで思い起こすべきなのは、1910 年現在の Quentin が Caddy の処女性と自殺の主題に終始取り憑かれながら最期の一日を過ごすという点である。つまり、性と死の主題が第 2 章の基調低音となっているのだ。ゆえに、Caddy のズロースが汚れ、祖母の葬式が挙げられた 1898 年の一日は、いみじくも第 2 章に通底するふたつの主題が凝縮された日であったと言える。そのような意味で Quentin にとってひととき象徴的であるはずの 1898 年のあの日の記憶が、彼の追憶の中にたった 2 度しか浮かんでこないのは、一体なぜなのか。とりわけ Quentin は、語り物の進行に伴って徐々に精神錯乱に陥り、章の終盤に至っては、彼の意識は性と死の色調に染め上げられる。そのことを思い合わせるならば、性と死の主題に接続する 1898 年のあ

の日の記憶が、章の序盤でたった2度しか直接的に呼び起こされないという事実は、一種異様な **Quentin** の意識の様態をほのめかしているように思われる。

管見の限り、**Quentin** の語りにおける1898年の記憶の希薄さに言及した批評は見当たらない。もっとも、批評史において、1898年のあの日に泥で汚れた **Caddy** のズロースが、**Quentin** にとって一種の象徴と化し、1910年現在も彼の意識に強迫観念的にこびりついているということはもはや常識とされている (**Brown** 549; **Csicsila** 80-81; **Irwin** 16-17)。そのことは、ズロースの象徴性を確言した **Faulkner** 自身の言葉からも窺われよう (“**Introduction to**” 255)。だが、従来の批評は **Quentin** の意識における1898年の記憶の重要性を認めつつも、その記憶の異様なまでの希薄さには目を留めてこなかった。しかしながら、第2章そのものが半ば追憶の物語である以上、1898年の一日に関わる記憶の希薄さは、**Quentin** の意識の様相を紐解くひとつの糸口になるのではないか。

かつて、この作品の全章を四面鏡に見立てて読み解いた **Lawrance Thompson** は、それぞれの物語を相互に照射させることで、ひとつひとつの物語を異なる角度から読むことができると指摘し、それこそがこの作品の芸術性であると結論づけた (120)。本稿では、**Thompson** の言に倣い、*The Sound and the Fury* の第1章と第2章を合わせ鏡のごとく反射させつつ、**Benjy** が描き出す1898年のあの日の光景を、**Quentin** の意識下に眠る原風景として探ってゆく。そうすることで、**Quentin** の追憶に見られるひとつの特異性をあぶり出してみたい。

## 2. 第2章におけるあの日

第2章において、語り手 **Quentin** は、**Boston** の街を移動し続ける中で、目に映る光景を描きつつ、繰り返し呼び覚まされる追憶に身をゆだねてゆく。つまり、過去の記憶が間隙を縫うようにして語りの現在に入り込んでくるのだが (**Sartre** 319)、まず注目したいのは、過去の事象が様々な形をと

って **Quentin** の最期の一日に反復されているという **John Irwin** の指摘である (9)。この指摘を念頭に置いて第 2 章を読む時、1898 年のあの日の光景が、いわば残像となって、**Quentin** の現在に浮かび上がってくる。

たとえば、章の中盤、**Quentin** が釣竿を持った少年たちに遭遇する場面があるが、そこには、1898 年のあの日の光景が二重写しになっている。

The boy turned from the street. He climbed a picket fence without looking back and crossed the lawn to a tree and laid the pole down and climbed into the fork of the tree and sat there, his back to the road and the dappled sun motionless at last upon his white shirt.  
(123；下線筆者)

少年のひとりが釣りに行こうと提案するのだが、他のふたりは彼の提案を撥ねつけ、川遊びに行ってしまう。奇妙なことに、残された少年は釣りには行かず、釣竿を足元に置き、傍にあった木に登ってゆく。少年が木に登った理由は明示されないが、この場面で木の股に座る少年の姿は、1909 年に **Caddy** の恋人 **Dalton Ames** と相まみえたのち、木に凭れて座り込む **Quentin** の姿を想起させ得る (大橋 181)。とはいえ、木に登るという行為が読者に思い出させるのは、何にもまして、1898 年の **Caddy** による木登りの場面であろう。つまり、木に登る少年の姿は、1898 年のあの日、梨の木に登った **Caddy** の姿とも重なっているのではないかということである。木によじ登る子供の姿をとおして、読者の脳裏に、1898 年のあの日の光景がふいに呼び起こされるのだ。

加えて、**Quentin** はのちに、川に向かったふたりの少年と再会することになるが、その場面でも 1898 年のあの日の光景が陰画のごとくあぶり出される。

“Go on away, Harvard!” It was the second boy, the one that thought the horse and wagon back there at the bridge. “Splash

them, fellows!”

“Let’s get out and throw them in,” another said. “I aint afraid of any girl.”

“Splash them! Splash them!” They rushed toward us, hurling water. We moved back. “Go on away!” they yelled. “Go on away!”  
(137-38；下線筆者)

ここで **Quentin** は、偶然出会ったひとりの少女と行動しているのだが、少女を連れている **Quentin** に反発した少年たちは、川の水をかけてふたりを追い払おうとする。この場面で描かれる少年たちの姿は、川という空間表象を介して、1898年のあの日、屋敷近くの川で互いに水をかけ合っていた **Quentin** と **Caddy** の姿を思い起こさせる (**Ross and Polk 108, 120**)。また、この引用部で “splash” という語が反復されていることも示唆深い。少年たちが裸になって川遊びに興じているこの場面で反復される “splash” の語には、性的な含意が透けて見えるからである。1898年の川遊びの描写は、泥で汚れた **Caddy** のズロースをとおして、**Caddy** という女性の行く末を性的な文脈から暗示していると言ってよいが、1910年現在において川で遊ぶ少年たちの描写もまた、男女の性を反転させた形で、性の主題を滲ませている。いずれにせよ、この引用部でも、**Quentin** の現在と1898年のあの日の光景がいわば二重写しになっているのだ。

あるいは、章の終盤、**Quentin** が友人 **Shreve** と **Spoade** に対して放つ台詞にも、1898年の残響を聴き取ることができる。**Boston** の街を動き回ったのち、**Mrs Bland** 主催のドライブに同行する **Quentin** はやがて、過去の記憶に没入するあまり錯乱し、**Harvard** 大学の知人 **Gerald** を殴りつけて返り討ちに遭う。その後、手当てをしてくれた友人たちに向かって “Tell **Mrs Bland** I’m sorry I spoiled her party” (168) と伝言を託し、ひとりその場を去る。直前の場面において、**Mrs Bland** によるドライブは “picnic” (167-68) と称されているのだが、引用文が示すように、**Quentin** があえて “party” という語を用いていることは見逃せない。すでに第1章を知る読

者にとって、この語は聞き覚えのあるものだからである。つまり、この“party”の語は、1898年のあの日、祖母の葬式を“party”(26, 36)と勘違いするCaddyの言葉と連想的に結びつくのだ。Mrs Bland主催の「パーティ」を離れ、ひとり丘を登ってゆくQuentinの姿は、12年前のあの日、Caddyの言う「パーティ」-すなわち葬式-から爪弾きにされ、屋敷の外を歩いていた四兄妹の姿と重ねられるのだ。もっとも、12年の月日を隔てたふたつの場面が相似形を成しているとはいえ、四兄妹が揃って除け者扱いされた1898年の場面と比して、1910年現在はQuentinただひとりが「パーティ」から離脱したわけであり、そこには、孤独なQuentinの姿がより前景化された形で示されているのだが。

とまれ、第1章を読んだ読者は、第2章で展開されるQuentinの現在に、1898年の光景を重ね合わせることになる。そのような仕掛けがこの作品には施されている。第1章において、語りの現在におけるBenjyの行動-すなわち、川に向かい、屋敷の内外を彷徨い、やがて寝室に戻るという一連の行動-は、1898年のあの日のそれとかなりの程度類似しているが(大橋 80)、第2章で描かれるQuentinの現在もまた、12年前のあの日の光景を様々な形で反復するのだ。加えて、*The Sound and the Fury*が、元々は“Twilight”という表題の短編作品として出版される予定であったことをここで思い出してもよい(Gorra, “Preface” vii)。その表題が明示するように、短編を膨らませて完成した*The Sound and the Fury*においても、黄昏時のイメージが作品の原風景となっている。それは、この作品における主要な出来事の多くが黄昏の時刻に起こっていることから窺われる(Ross and Polk 136)。それゆえ、第1章と第2章における語りの現在を除けば、1898年のあの日の記憶のみが、日暮れを経て夜に至るといった時間の経過が明記された一日として追憶される点は、特筆に値する。とりわけ、1898年のあの日、幼いQuentinは川から屋敷に帰る道中で、“If we walk slow it’ll be too dark for them to see”(20)とか“If we go slow, it’ll be dark when we get there”(20)といった言葉を繰り返し口にする。そうしたQuentinの言葉がほのめかす黄昏時の光景は、1898年の一日が作品の原風景のひとつ

つであることを、たしかに物語っている。だからこそ、作品の原風景となっているあの日の光景は、第2章において、Quentinの現在の中に残像となって反復的に立ち現れるのだ。

しかしながら、我々読者が Quentin の現在のうちに 1898 年のあの日の残像と残響を掬い取ることができたとしても、Quentin の意識がそこから 1898 年のあの日の記憶に直接的に結びつくことはない。この文脈で目を向けるべきなのは、第2章に死者の弔いを想起させる描写が散見されるということである。たとえば、章の序盤、大学の講義を欠席してスーツを着込む Quentin に対し、Shreve は皮肉交じりに “Well, you didn’t . . . Is it a wedding or a wake?” (82) と問いかける。ここでは、“wake” という語をとおして「通夜」という弔いの場が引き合いに出されている。また、章の終盤で Quentin は、黒人についての想念に浸る中で、黒人は笑う理由がない時に笑い、泣く理由がない時に泣くものだと述べたのち、やや唐突に “They will bet on the odd or even number of mourners at a funeral” (170) と語る。第1章で祖母の葬式を表すのに用いられていた “funeral” の語が、ここで再び使用されていることに留意したい。そうした弔いのイメージが、いま少し婉曲的にほめかされる場面もある。章の中盤、Quentin が少女を連れて街を歩いている時、ふいに目の前の道が途切れるのだが、その光景を彼は “The lane went back to a barred gate, became defunctive in grass, a mere path scarred quietly into new grass” (133) と言い表す。この引用部において、道が「途切れた」という意味で、元来は葬式を意味する “defunctive” という形容詞が用いられている点は注目すべきである。この作品に膨大な註を付した Stephen Ross と Noel Polk も、この場面で用いられるこの語には、ただ道が消えるという意味合いだけでなく、たしかに葬式の含意があると指摘する (116-17)<sup>3</sup>。この場面にも、死者の弔いのイメージが漂うのだ。しかし、こうした弔いの儀式にまつわるイメージが、Quentin の回想において、1898 年の祖母の葬式の記憶に接続することは決してない。Benjy によって語られる第1章であれば、「葬式」という語が用いられるや否や、ただちに連想が働き、1898 年の記憶に結びつ

きそうなものだが、ひとつの言葉から過去に聞いた同一の言葉へと容易に流れてゆく Benjy の意識とは異なり、Quentin の意識の中でそのような連想は起こらない。

他方で、第2章には、こうした死者の弔いのイメージに加えて、水死にまつわる想念や、自殺をめぐる父との対話の記憶も頻繁に挿入され、章全体をとおして死の匂いが充満している。そうした中であっても、先に挙げたふたつの箇所を除けば、Quentin の意識が1898年の祖母の葬式の日には立ち返ることはない。前述のように、1898年のあの日は、Caddy のズロースが泥で汚れ、祖母の葬式が執り行なわれたという点で、性と死の主題が密接に絡み合った一日であった。そのことは、「泥」を表す“muddy”の語と、祖母の呼び名である“Damuddy”の語の音声的な重なり合いが示唆するとおりである (Bleikasten 216)。1898年のあの日は、1910年現在の Quentin の思考を覆うふたつの主題が前景化された一日であったと言ってよい。それゆえ、死の主題に鑑みるなら、1898年の一日は、Quentin にとって、身内の死を体験した唯一の日であり、死を最も身近に感じた日であったはずである。また、Quentin の回想の中心はあくまでも Caddy であり、彼女の処女喪失と結婚に関する断想であるのだから (Fox 70)、性の主題という文脈においても、Caddy のズロースが泥で汚れた1898年の一日はきわめて象徴的な意味合いを帯びている。それにもかかわらず、Quentin にとって—そしてまた第2章全体にとって—核心的なあの日の記憶が、なぜか彼の回想にはほとんど現れない。だからこそ、Benjy の名前のつけ替えや Uncle Maury の情事に関する記憶、クリスマスの帰郷の思い出など、直接的には性と死の主題に結びつかない数々の記憶が差し挟まれている中で、1898年の記憶がたった2度しか想起されないのは、いささか奇妙に思われる。Quentin の反復強迫的な思考の中に窺われる1898年の記憶の希薄さは、いわば不自然な欠落として、読者に提示されているのだ。



### 3. あの日の **Quentin** と記憶の抑圧

ここで改めて考えなければならないのは、1898年のあの日が、**Quentin**にとってどのような一日であったのかという点である。この問いについて考える手がかりとなるのは、**Faulkner** 自身の言葉と作品のあいだに見られるひとつの食い違いである。この日の一連の流れは先述のとおりだが、その中でも特に、葬式的最中にひとりの少女が木に登り、男兄弟が木の下から彼女を見上げるという構図が *The Sound and the Fury* 執筆の出発点となったことは周知の事実である。そのことについて **Faulkner** は、この作品の新版刊行に際して書いたふたつの序文の中で、次のように書き記している。

I believed . . . that in the *Sound and The Fury* [sic] I had already put perhaps the only thing in literature which would ever move me very much : Caddy climbing the pear tree to look in the window at her grandmother's funeral while Quentin and Jason and Benjy and the negroes looked up at the muddy seat of her drawers. (**Faulkner**, "Introduction for" 251 ; 下線筆者)

I saw that they had been sent to the pasture to spend the afternoon to get them away from the house during the grandmother's funeral in order that the three brothers and the nigger children could look up at the muddy seat of Caddy's drawers as she climbed the tree to look in the window at the funeral . . . . (**Faulkner**, "Introduction to" 255 ; 下線筆者)

どちらの序文においても、**Faulkner** は、小説の原型となったひとつのイメージに言及しており、木に登る **Caddy** とそれを下から眺める三兄弟の姿がこの小説の萌芽になったのだと記している。ここでは、下線を引いた

“Quentin”と“the three brothers”という部分に目を向けたい。これらの下線部が示すように、Benjy や Jason とともに、Quentin もまた、木の下から Caddy を見上げている—そのような光景が小説の原点であったと作者自身が述懐しているのだ。それゆえ、André Bleikasten や David Minter といった Faulkner 研究の泰斗も、この序文を踏まえたとて、この光景こそ *The Sound and the Fury* に描かれた核心的な場面であると指摘する (Bleikasten 53 ; Minter 96)。

しかし、作品を注意深く読んだ時、この序文の言葉と実際に出版された作品のあいだには、ひとつの齟齬があることに気づかされる。というのも、第1章で Caddy が梨の木に登る場面は、作中では次のように描かれているからである。

We looked up into the tree where she was.

“What she seeing, Versh.” Frony whispered.

“Shhhhhhh.” Caddy said in the tree. Dilsey said,

“You come on here.” She came around the corner of the house.

“Whyn’t you all go on up stairs, like your paw said, stead of slipping out behind my back. Where’s Caddy and Quentin.” (45 ; 下線筆者)

Caddy が木に登って屋敷の中を覗き込んでいる時、Dilsey が子供たちの前に現れるのだが、彼女には木の上にいる Caddy の姿は見えていない。それゆえ Dilsey は Caddy の所在を子供たちに尋ねる。ここで強調したいのは、下線部が示すように、この場面には Quentin が居合わせていないという点である。そのことは、上の引用部に続く次の場面でも言及される。

“You hush your mouth and get quiet, then.” Dilsey said.

“Where’s Quentin.”

“Quentin’s mad because we had to mind me tonight.” Caddy

said. "He's still got T. P.'s bottle of lightning bugs."

"I reckon T. P. can get along without it." Dilsey said. "You go and find Quentin, Versh. Roskus say he seen him going towards the barn." Versh went on. We couldn't see him. (45-46; 下線筆者)

下線を引いた箇所では Dilsey が繰り返し述べているように、1898 年のあの日、Caddy が木に登っている時、そこに Quentin の姿はない。つまり、先に見た Faulkner の序文における説明とは異なり、小説の核心的な場面において、四兄妹の中で Quentin ただひとりが不在なのだ<sup>4</sup>。

序文の言葉と作品のあいだのこの食い違いを、読者はどのように捉えるべきなのだろうか。奇妙なことに、この問題について詳述した批評はなく、序文の言葉に釣られて Quentin も木登りの場にいたと誤読している批評家がほとんどである—そう指摘したのは Webb Salmon であった。Salmon は、Caddy の性の問題によって最も悲劇的な影響を受けることになる Quentin がこの木登りの場面にいないことは一種のアイロニーになっている、という自説を提示しつつ、序文の言葉は Faulkner の記憶違いゆえに起きた不正確なものだと指摘する (51)。だが、たしかに Salmon の論考は示唆に富んでいるものの、この食い違いが作者の記憶違いゆえのものであったとは、にわかには考え難い。作品の中では、1898 年のあの日、Caddy や Benjy とは別行動を取る Quentin の姿が幾度も描かれているからである。たとえば、あの日の夕暮れ時、Caddy たちが川を離れ、家路に就こうとする一方で、Quentin だけがただひとり川辺に佇んでいる様子が、"Quentin didn't come. He was down at the branch when we got to where we could smell the pigs" (20) や "Quentin was still standing there by the branch" (22) という記述によって反復的に描き出される<sup>5</sup>。また、夕餉を済ませた Caddy たちが屋敷を出る場面でも、Benjy が "Quentin wasn't coming with us. He was sitting on the kitchen steps" (28) と語るように、姉弟と離れて別行動している Quentin の姿が再び描かれる。あるいは、この章の最後には、"Quentin and Versh came in. Quentin had his face turned

away” (73) という描写が埋め込まれており、Benjy たちが寝る支度をしている最中、ひとりどこかに行っていた Quentin が世話係の Versh に連れられて後から部屋に入ってくるさまも明示されている。このように Faulkner は、1898 年のあの日、妹弟と離れて単独行動を取る Quentin の姿を反復的に強調しているのだ。したがって、Faulkner が Quentin の不在について勘違いをしていたという見方は、いささか強引だと言わざるを得ない。それならば、序文と作品のあいだに見られる齟齬は、Faulkner の記憶違いを示唆するものではなく、作品執筆の過程で Faulkner が小説の原型的光景に修正を施したことを暗示していると考えるのが自然であろう<sup>6</sup>。すなわち、Faulkner の想像の中で元々木の下にいた Quentin は、何らかの理由で、ひとり別行動を取られることになったということである。

とすれば、次に考えるべきは、どうして Faulkner は木登りの場面から Quentin の存在を抹消したのか、そしてまた、Caddy が木に登り、弟たちが彼女を見上げているあいだ、一体 Quentin はどこで何をしていたのか、ということだ。これらの問いについて、作品は明確な答えを示しはしない。だが、この日の就寝前、寝室に入ってきた Quentin に対し、“What are you crying for” (73) と問いかける Caddy の言葉が、このふたつの問いについて考える糸口となるだろう。先に見たように、Benjy たちと別れる前の Quentin は、ただ階段に腰かけているだけなのだが、再び Benjy たちの前に姿を見せた時、彼は妹弟から顔を背け、涙を流している。したがって、Caddy が梨の木に登っている時に、Quentin が感情を揺さぶられる何らかの体験をしたことは間違いない。その点で、この不在のあいだに Quentin は祖母が死んだという事実を知ったのではないか、という Salmon の推測には、それなりの説得力がある (51)。Quentin の涙は、彼がこの夜、祖母の葬式の様子—または祖母の遺体そのもの—を目にした可能性を示唆しているということである。一方で、この日の夕刻、川遊びを終えた Quentin は、Caddy のブローズが泥で汚れたために、屋敷に戻ればふたりして叱られることになるだろうという旨の発言をしている (19)。それゆえ、Quentin はこの夜、妹が叱られるさまを見たくなかったがために彼女たちと離れて行動

したのかもしれない。それにもかかわらず、ちょうど Dilsey が泥汚れのことで Caddy を咎めている時に寝室に入ってきた Quentin は、叱られている妹の姿を目の当たりにしてしまう。この文脈で読むならば、彼の涙が、最期の日まで彼の脳裏にこびりつくことになる Caddy の性の主題に関わるものである可能性も捨てきれない。あるいは、章の最後に流される Quentin の涙は、上述のふたつの理由が絡み合った結果引き起こされた、いわば複層的な感情の発露なのかもしれない。いずれにせよ、彼は、激しい感情に囚われているがゆえに、妹弟が目の前にいるにもかかわらず、涙を抑えきれないのだ。

加えて、Quentin が涙を見せるのは 1898 年のこの日を措いて他にないという点に目を向けてもよい。批評家 Susan Parrish は、1927 年に起きた Mississippi 大洪水のイメージが *The Sound and the Fury* を執筆する Faulkner の意識下にあったことを論証する中で、Quentin の意識と水のイメージの分かち難い結びつきを指摘した (46-47)。Parrish が言うように、Quentin によって語られる第 2 章には、たしかに水にまつわる描写が頻出するが、第 1 章で描かれる 1898 年の一日こそ、水のイメージが横溢する小説内最古の記憶ではなかったか。川で遊ぶ兄妹の描写に始まるこの一日は、彼らが互いに水をかけ合った日であり、Caddy のズロースが泥水で濡れ、兄と姉の言い合いに Benjy が涙を滲ませ、祖母と眠れないことに対して Jason が頬を濡らす日であったのだから (26-27)。そのような意味で、水のイメージに貫かれた 1898 年の一日は、水に取り憑かれた Quentin の意識のうちに原風景として刻印されているはずである。そして、この日の幕引きで流されるのが、他ならぬ Quentin 自身の涙なのである。その涙には、幼い Quentin の抑えきれぬ感情が凝縮されている。

1898 年のあの日が、Quentin の感情を激しく揺さぶった一日であったことは疑うべくもない。そのように考えるならば、Faulkner が、小説執筆の過程で作品の原型的イメージに修正を加え、Quentin の存在を木登りの場面から削除したのは、ひとえに、幼い Quentin に強烈な感情の昂ぶりを体験させるためであったということになろう。序文と作品のあいだの小さな齟

齧が、作品の原型的光景に修正が施された事実と、それゆえに **Quentin** が味わうことになった激しい感情をほのめかすのだ。

そのことを勘案するなら、第2章をとおして、1898年の記憶があまりにも希薄であるのは、**Quentin** の意識のうちに、いわば記憶の抑圧が働いているからなのではないか。性と死の主題を前景化し、あまりにも激しく己の感情を揺さぶった1898年のあの日を思い出すことは、**Caddy** の性と己の死の想念に苛まれた **Quentin** にさらなる心理的負荷をかけることになるのだから。そもそも、第2章では、**Caddy** の妊娠告白にまつわる記憶の前後に、**Gerald** の黒人召使いに関わる逸話など、いくつかの喜劇的な記憶が差し挟まれており、**Quentin** が妹の妊娠という痛ましい記憶の想起に伴う「心理的な負担を無意識に相殺しようとしている様子」が見て取れる（新納45）。さらに、**Quentin** の語りには途中で途切れた文章も多々見受けられるが、それらは痛ましすぎるものを語るまいとする **Quentin** の意識をほのめかしてもいる（**Ross and Polk** 132）。**Quentin** の語りからは、精神的負荷を抑えんとする防衛機制が窺われるということだ。この文脈において、**Quentin** の語りの中では **Caddy** の妊娠に関わる記憶が「極端に断片化された形で想起されており」、彼が「それを思い出すことに困難を味わっている印象を受ける」という新納卓也の卓見を思い出してもよいだろう。新納は、**Faulkner** が **Quentin** の「思い出しかたに仕掛けを施し、その記憶に抑圧が働いているさま」を示すことで、「彼の痛恨の思いや疎外感に満ちた苦しさ」を伝えようとしているのではないかと推察する（44-45）。**Quentin** の語りにおける欠落や記憶の断片化は、彼の心的外傷をたしかに物語っているのだ。先述したように、章の終盤にかけて、**Quentin** の精神は徐々に錯乱の様相を呈し、ついに彼は妹の性にまつわる記憶と己の死に関する想念へと埋没してゆく。だが、彼の意識には、そうなるまいとする一種の抑制が働いているのだ。最期の日、**Quentin** が **Boston** の街を絶えず移動するのは、性と死に関わる思索に耽るためでもあるわけだが、そうした哲学的思考を巡らせるためには、彼は知性の人であり続けなければならないのだから。それゆえ **Quentin** は、かつての激しい情緒を思い出させ、自らの精神を錯乱へ

と引き込みかねない 1898 年のあの日の記憶を、その意識下に抑圧する。だからこそ、本稿のはじめに言及したように、章の序盤で Quentin がふと 1898 年のあの日を思い出す時も、彼の脳裏をよぎるのは、性と死の主題ではなく、妹の家出と弟の嗅覚にまつわるあの日の記憶なのだ。読者の知る限り Quentin が最も感情を露わにした 1898 年の記憶こそ、何よりも抑圧されるべきものとして、Quentin の意識の奥底に封じ込められている。

#### 4. おわりに－記憶の回帰

しかし、Sigmund Freud が指摘したように、抑圧されたものは回帰する。1910 年現在の Quentin が 1898 年のあの日のことに言及するのは、章の序盤でわずかに 2 度だけだと先に述べたが、章の終盤、文章の文法則が乱れ始めた時－つまり Quentin の語りが統制力を失い始めた時－1898 年のあの日の記憶がふいに、間接的な形で、繰り返し差し挟まれる。

then I was crying her hand touched me again and I was crying  
against her damp blouse then she lying on her back looking past  
my head into the sky I could see a rim of white under her irises I  
opened my knife

do you remember the day damuddy died when you sat down in the  
water in your drawers

yes (151-52; 下線筆者)

but she didnt move her eyes were wide open looking past my head  
at the sky

Caddy do you remember how Dilsey fussed at you because your  
drawers were muddy (152; 下線筆者)

このふたつの引用部はどちらも、1909 年に Quentin と Caddy が交わした

会話の断片である。下線を引いた箇所がそれぞれ示すように、Quentin は、11年前のあの日を覚えているかと Caddy に問う。とりわけ、1898年のあの日のことが、記憶の中の記憶として言及されている点に留意したい。つまり、このふたつの下線部は、現在の Quentin が1年前の Caddy との会話を回想し、さらにその回想の中の Quentin が1898年のあの日を思い出すという、いわば入れ子構造の追憶を示しているということである。第2章全体を見渡してみても、このように追憶の中の Quentin がさらに過去を回想する箇所は他にない。あるいは、*The Sound and the Fury* そのものが追憶の物語である以上、作品を象徴する“remember”の語が反復されるこのふたつの引用箇所こそ、追憶の主題を前景化する核心的な場面であると言ってもよい。そのような場面において、1898年のあの日の記憶が、Quentin の記憶の中の記憶として、想起されるのだ。

*The Sound and the Fury* は Compson 家のひとびとの悲嘆を描いた哀歌であるが (Penner 28)、作中で Quentin がとめどなく涙をこぼす1898年のあの日こそ、彼が最も悲嘆の情に圧倒された一日であった。だからこそ、1898年の記憶は、過大な精神的負荷をもたらすものとして、Quentin の意識下に抑圧される。しかしながら、章の終盤にかけて生じる精神の錯綜と語りの混乱に乗じて、あの日の光景がふいに、追憶の中の追憶として、Quentin の意識の中に甦るのだ。裏返して言えば、Quentin は、Caddy の性と自らの死の想念に没入してゆく中でさえ、あの日のことを追憶の中の追憶として間接的に回想することしかできないのだ。かくて、その特異な追憶の在りかたは、過去の記憶に呑み込まれまいと悶え苦しむ、愛と苦悩のひとの精神病理を、克明に物語っている。

#### 註

<sup>1</sup> 日本ウィリアム・フォークナー協会編『フォークナー事典』では、第2章の中で祖母の葬式の日の記憶と断定できるものは、この2箇所のみとされているが、同じく章の序盤に見られる“Jason ran on, his hands in his pockets fell down and lay there like a trussed fowl until Versh set him up. *Why'n't you keep them hands outen your pockets when you running you could stand up then*” (101) という描写



を1898年の日の記憶として捉える見方もある (Ross and Polk 77)。また、祖母の葬式が執り行なわれた日の年代推定にも諸説あり、1900年の出来事だとする見方もあるが (Ross and Polk 3)、本稿では場面転換および年代推定については全て『フォークナー事典』の説を採る。

<sup>2</sup> 以下、*The Sound and the Fury* からの引用は全て Vintage International 版に拠り、本文中の括弧内に頁数のみを記す。また、作品からの引用文において、イタリック体は全て原文のものである。

<sup>3</sup> 尾上政次は、T. S. Eliot (1888-1965) が1920年に発表した詩の中で遠ざかってゆく甲鐘を表すために“defunctive”の語を用いていることに着目し、*The Sound and the Fury* におけるこの語の意味合いにも、Eliot から受けた影響—すなわち葬式の含意—が認められると指摘する (49-51)。

<sup>4</sup> たとえば、先に挙げた Bleikasten や Minter も、小説の原型的イメージと作中の描写を混同しているようで、Quentin の不在には言及していない (Bleikasten 53-54; Minter 96)。また、寺沢みづほも、少女が木に登り、三兄弟がそれを見上げるという構図が、作品の中に「そのまま」再現されていると指摘しており、Quentin の不在という問題を看過している (160-61)。Ross と Polk は、この木登りの場面における Quentin の不在に言及しているが、その理由については触れていない (26)。

<sup>5</sup> 大橋健三郎は、1898年のあの日、Caddy たちが梨の木に向かおうとする時、Quentin がただひとり台所の上がり段に腰かけているのは、夕餉の席で母の泣き声を聞いた Quentin が祖母の死に気づき始めたからであろうと推測する (63)。そのうえで大橋は、Salmon と同じく、この日の終わりに Quentin が涙を流すのは、彼が祖母の死を知ったためであると断言している (104)。

<sup>6</sup> 木登りの場面における Quentin の不在と、その場面の前後で Quentin が妹弟と離れて単独行動を取っているさまは、*The Sound and the Fury* の自筆原稿にもそっくりそのまま書き記されている (Faulkner, *Manuscripts* 8, 10, 13, 20, 21, 27, 33)。この事実は、作品執筆の最初期の段階からすでに、木登りの場面における Quentin の不在が想定されていたことを示している。

## 引用文献

Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure : Faulkner's The Sound and the Fury*. Indiana UP, 1976.

Brown, May Cameron. “The Language of Chaos : Quentin Compson in *The Sound and the Fury*.” *American Literature*, vol. 51, no. 4, Jan. 1980, pp. 544-53.

Csicsila, Joseph. “‘The Storm-Tossed Heart of Man’ : Echoes of ‘Nausicaa’ in Quentin’s Section of *The Sound and the Fury*.” *The Faulkner Journal*, vol.

- 13, no. 1 / 2, Fall 1997 / Spring 1998, pp. 77-88.
- Faulkner, William. "An Introduction for *The Sound and the Fury*." Gorra, pp. 249-52.
- . "An Introduction to *The Sound and the Fury*." Gorra, pp. 252-57.
- . *The Sound and the Fury*. 1929. Vintage International, 1990.
- . *William Faulkner Manuscripts 6*. Introduced and arranged by Noel Polk, vol. I, Garland Publishing, 1987.
- Fox, Heather. "A Circlin' Buzzard : Positioning in Quentin's Narrative." *The Faulkner Journal*, vol. 27, no. 1, Spring 2013, pp. 65-76.
- Gorra, Michael. "Preface to the Third Edition." Gorra, pp. vii-xii.
- , editor. *The Sound and the Fury*. Norton Critical Edition, 3rd ed., Norton, 2014.
- Irwin, John T. "Doubling and Incest / Repetition and Revenge." *William Faulkner's The Sound and the Fury*, edited and with an Introduction by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1988, pp. 9-22.
- Minter, David. *William Faulkner : His Life and Work*. Johns Hopkins UP, 1980.
- Onoe, Masaji. "Some T. S. Eliot Echoes in Faulkner." *Faulkner Studies in Japan*, compiled by Kenzaburo Ohashi and Kiyoyuki Ono and edited by Thomas L. McHaney, U of Georgia P, 1985, pp. 45-61.
- Parrish, Susan Scott. "Faulkner and the Outer Weather of 1927." *American Literary History*, vol. 24, no. 1, Spring 2012, pp. 34-58.
- Penner, Erin. *Character and Mourning : Woolf, Faulkner, and the Novel Elegy of the First World War*. U of Virginia P, 2019.
- Ross, Stephen M., and Noel Polk. *Reading Faulkner : The Sound and the Fury*. UP of Mississippi, 1996.
- Salmon, Webb. "On Quentin's Absence from Caddy's Tree-Climbing Scene." *The Faulkner Journal*, vol. 3, no. 2, Spring 1988, pp. 48-53.
- Sartre, Jean-Paul. "On *The Sound and the Fury* : Time in the Work of Faulkner." Translated by Annette Michelson, Gorra, pp. 316-24.
- Thompson, Lawrance. "Mirror Analogues in *The Sound and the Fury*." *Faulkner : A Collection of Critical Essays*, edited by Robert Penn Warren, Prentice-Hall, 1966, pp. 109-21.
- 大橋健三郎『ウィリアム・フォークナー 響きと怒り／解説詳注』, 英潮社, 1979年.
- 寺沢みづほ『民族強姦と処女膜幻想－日本近代・アメリカ南部・フォークナー』, 御茶の水書房, 1992年.
- 新納卓也「『響きと怒り』再読－クエンティンの自殺をめぐる考察』『フォークナー』

第9号, 2007年, 40-49頁.

日本ウィリアム・フォークナー協会編『フォークナー事典』, 松柏社, 2008年.